

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：32685

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26750084

研究課題名(和文) 国際教育協力における映像コンテンツを活用した授業研究モデルの開発

研究課題名(英文) Development of a Lesson Study Model using Educational Video Programs: A Model for International Educational Cooperation

研究代表者

今野 貴之 (KONNO, TAKAYUKI)

明星大学・教育学部・准教授

研究者番号：70632602

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、国際教育協力のモデルのひとつとして、日本の映像コンテンツを活用した授業研究モデルを提示した。映像コンテンツは、制作する国の文化・歴史観を含むため、途上国の教育現場にそのまま提供するだけでは授業改善が行われない。本研究は、教師が直面している葛藤とその葛藤を解決するための方略について、映像コンテンツを用いた授業研究のプロセスに焦点を当てている。研究の結果、授業研究モデルの要因として、(1)学習環境や授業設計などを配慮した映像コンテンツ紹介、(2)参加型ワークショップによる研修の必要性、(3)授業研究の意義を確認できる機会の設定の3つを示した。

研究成果の概要(英文)：This study proposed a lesson study model utilizing Japanese educational video programs as a model for international educational cooperation. Since educational video programs typically include the culture and history of the country in which they originate, merely providing educational video programs to schools in developing countries limits the effectiveness of the lessons. This study focused on the process of using Japanese educational video programs in lessons in order to identify the conflicts the teacher faces and propose strategies for resolving those conflicts.

As a result of the study, the author identified three important factors that need to be considered, which were: 1) Introduction of Japanese educational video programs with knowledge and experience regarding in the learning environment and lesson design; 2) The necessity of teacher training by participatory workshops; and 3) Setting opportunities to confirm the significance of lesson study.

研究分野：教育工学

キーワード：教育工学 教師教育 授業研究 映像コンテンツ 国際教育協力 教育開発 EDU-Port SDGs

1. 研究開始当初の背景

近年、情報通信技術 (Information and Communication Technology、以下 ICT) の発展により、日本の大学や教育機関も、国際交流や国際教育協力を目的として講義やシンポジウム、独自で開発した教育番組を英語・スペイン語・フランス語・中国語へ翻訳し、発信している。これらの映像コンテンツは、教育の質的向上や日本の文化を伝えるリソースになりうる。

研究代表者はシリアやインドなどの途上国の教師教育や授業改善に関わった (たとえば KONNO, T. et al. 2012)。これまでの研究成果を精査する中で、国際教育協力を目的として、途上国の教育現場に映像コンテンツをそのまま提供するだけでは授業改善が行われるわけではないことがわかった。そのため、映像コンテンツを提供しても、想定するように授業で使用されないことがある。たとえ使用されたとしても、映像を学習者に見せるのみで、学習目標や前後の授業との関係を説明できないなどの問題がおこる可能性がある。さらに、それぞれの文化に所属する教師は、教師の持つ教育観や教育現場の特徴に影響を受けながら教育を行うため (佐藤 1997)、常にその国の教育文化に合わせて映像コンテンツが解釈され、用いられる。したがって、途上国への国際教育協力において、他文化を含む映像コンテンツが、現地の教師や学習者の文化・歴史観を通した時に、どのように意味解釈され、それが学習とどのようにかわるのかを捉えていくことは授業改善を進める上で重要な要素となる。

映像コンテンツが授業改善に活用され、学習者にとって意味のある学習活動が展開されるために、本研究では、映像コンテンツ利用の可能性と課題を整理するとともに、授業改善を目指す途上国の学校に、教師が自ら教材の活用方法を検討する授業研究を導入する。授業研究とは、教師が、他の教師と協働して互いの授業を批判・検討し合うことで、その改善を自律的に図り授業力量を形成させていく、現職教師教育の取り組みのひとつである (秋田・ルイス 2008)。授業研究は、教育現場で起きている問題をその場に関わる教師同士が協働で自律的に改善できることから、アメリカ、イギリスなどの先進国のみではなく、ミャンマーやザンビアなどの途上国でも広がり、途上国の文化・歴史観を配慮しておこなえる教師教育の方法のひとつといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、国際教育協力のモデルのひとつとして、日本の映像コンテンツを活用した授業研究モデルを提示することである。映像コンテンツは、制作する国の文化・歴史観を含むため、途上国の教育現場にそのまま提供するだけでは授業改善が行われない。映像コンテンツが授業改善に活用され、学習者

にとって意味のある学習活動が展開されるには、教材を活用する教師が自らその使用方法を検討する必要がある。そこで、本研究では教師が他の教師と協働して授業改善を自律的に図る授業研究に基づいて、日本の映像コンテンツを活用した授業研究モデルを提示した。

3. 研究の方法

本研究は、以下の2つの研究手法を用いた。

(1) 先行事例や先行研究に基づいた映像コンテンツの選定

映像コンテンツを用いている国内外の事例、たとえば Open Course Ware や MOOCs などの活用事例を学習目標と活用形態の2つの観点から分析し、研究協力校の教育事情にあった映像コンテンツを抽出した。

(2) アクションリサーチによる授業研究モデルの評価・修正

本研究の対象地域は2つあった。ひとつはウズベキスタンである。ウズベキスタンに派遣されている研究協力者の青年海外協力隊員が関わる学校に、選定された映像コンテンツおよび授業研究を導入した。授業研究で議論される内容、および、映像コンテンツを授業で用いた教師へ「学習目標と映像コンテンツの関係性」「映像コンテンツを用いる際の問題点」について半構造化インタビューし、それらを分析データとした。

もうひとつはインドである。インドの NGO の学校において、授業研究や授業改善の内容がどのように実施されているのかを検討した。これは、インフラ設備が今後発展していく地域において、映像コンテンツを導入していくための土台づくりとしての授業研究の成果と課題を明らかにすることをめざした。その研究データとして、上記のウズベキスタンと同様に、授業研究で議論される内容の半構造化インタビューや授業研究後のリフレクションペーパーを分析データとした。

以上の分析データをもとに、実証研究と分析を繰り返す中で、授業研究において教師が直面する葛藤を明らかにし、その葛藤を解消するためにどのような介入をするべきなのか、アクションリサーチをおこなった。更に、問題点に関連する先行研究を整理し、授業研究モデルを評価・修正した。

4. 研究成果

本研究の結果、映像コンテンツの選定と映像コンテンツを活用した授業研究モデルとして3つの要因が明らかになった。以下にそれぞれを説明する。

(1) 映像コンテンツの選定

研究協力校へ渡航し、現地の教育関係者に英語に訳された教育番組を視聴してもらい調査を行った。それぞれの国で視聴させ

る教育番組は小平(1994)を参考にした。その結果、文化による影響をあまり受けない「理科」を選定し、その中でも自然科学の「実験」をおこなっている映像コンテンツ4つを選定した。

(2) 映像コンテンツを活用した授業研究モデルの要因

学習環境や授業設計などを配慮した映像コンテンツ紹介

これまで映像コンテンツを使ったことのない教師にとって、それをどのように授業の中にとりいれるか、どのような発問を組み合わせればよいのか、児童生徒に考えさせる時間をどのタイミングで取り入れれば良いのかという授業設計に関する問題があることが分かった。そこで、どのような学習環境を準備する必要があるのか、映像を授業のどこで使用できるのかという授業設計に居続けて映像コンテンツを紹介することが必要であることが分かった。

参加型ワークショップによる研修実施

映像コンテンツを授業に取り入れるということは、授業設計それ自体が変わるということである。映像コンテンツを教材として渡し紹介しただけでは、その意義や活用方法を理解されない可能性がある。映像コンテンツ提供と同時に、それらを活用した授業設計の講習が必要である。つまり、映像コンテンツを授業にとりいれるための参加型のワークショップ研修や、教師自身がそれらを活用した授業を受けるということである。さらに、そこで行う模擬授業を題材にして授業改善をおこなう授業研究と意味付けし、各校の授業研究として継続させていく。

授業研究の意義を確認できる機会の設定

授業研究はその国ごとによって実施のされ方が異なる。本研究の協力校では、映像コンテンツの活用方法や、授業改善のための教育方法はどのようにしていくかが授業研究の中で議論されていた。それを日本から随時確認していた。現地の教師は、日本人と関わることで自分たちが現在行なっている授業研究の意味や、授業研究をとおした授業改善の意義を確認することができていた。このように、映像コンテンツや授業研究を紹介するだけでなく、現地の教師にとって授業研究の意味や自分たちの実践の意義を確認できる機会を設けることが必要である。

本研究を通して、映像コンテンツを用いた授業研究のモデルを論文や学会発表で提示することができた。その知見を基に今後のさらなる研究の方向性として次のことがわかった。それは教師同士で授業の内容を検討し合う授業研究のような仕組みだけではなく、毎回の授業改善の知見を「学校の知見」として記録していくことの重要性である。

研究協力校へ授業研究の仕組みを用いても「授業技術の継承」という問題が、それぞ

れに学校に起こることがわかった。たとえ授業研究を行っても、教師個人が培ってきた映像コンテンツの活用方法のすべてを他の教師へ伝えたり、記録できたりするわけではない。また、教師が置かれている環境の不安定さや離職率の高さなどから、その教師が退職すると、学校は教師個人の教育方法・技術を失うことになる。つまり教師個人の授業技術が継承されないのである。

そこで教師個人の授業技術が継承していくためにも、毎回の授業改善の知見を「学校の知見」をして記録する仕組みづくりのような研究も重要であろう。

<参考文献>

秋田喜代美, キャサリン・ルイス(編著)
(2008)『授業の研究 教師の学習』明石書店

小平さち子(1994)タイ国におけるNHKテレビ教育番組の効果-小学生を対象とした調査から-。放送教育研究 第19号 :19-44

Konno, T., Kishi, M., Kubota, K. (2012) The Conflict and Intervention in an Educational Development Project -Lesson Study Analysis Using Activity System in Palestinian Refugee Schools-. Educational Technology Research Vol.35 Nos.1・2, pp.43-52.

箕浦康子(編著)(2009)『フィールドワークの技法と実際』ミネルヴァ書房

佐藤学(1997)『教師というアポリア -反省的实践家-』世織書房

山田肖子(2009)『国際協力と学校』創成社
フリック, U.(2002)『質的研究入門 -「人間の科学」のための方法論』春秋社

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

今野貴之(2017)1人1台タブレット端末環境における学校放送番組活用のための手立て. 日本教育工学会論文誌 Suppl(40): 101-104
DOI: 10.15077/jjjet.S40061

[学会発表](計12件)

今野貴之(2017)インドにおける日本型教員研修の成果と課題 -ブダガヤ市のNGOの学校を事例として-. 第33回日本教育工学会全国大会講演論文集, pp.931-932. (島根大学)

Konno, T. (2017) How Can Japanese Educational Videos Be Used to Improve the Quality of Education in Developing Countries? 15th International Conference for Media in Education 2017 (University of Hawaii, US)

菊地寛・中川一史・今野貴之(2016)小

学校理科における NHK for School を取り入れたグループ内の問題解決学習での相互作用に関する研究，第 42 回全日本教育工学協議会全国大会，pp.77-80. (奈良教育大学)

今野貴之 (2016) 学校現場における新しい教育技術・方法の導入に伴う課題，第 32 回日本教育工学会全国大会講演論文集，pp.277-278. (大阪大学)

Konno, T., Kishi, M. (2016) Factors of Usage a One-to-One Tablet PCs Environment Through Lesson Study in Japan. 10th The World Association of Lesson Studies 2016 (Exeter University, UK)

Konno, T. (2015) How Do Teachers Acquire Student's viewpoints in the Classroom? :A Lesson Study on Classroom Management in India. 9th World Association of Lesson Studies (Khon Kaen University, Thailand)

今野貴之・石井芳生 (2015) 協働的な学習の授業設計における学校放送番組活用の検討．第 22 回日本教育メディア学会発表論文集，pp.170-171. (日本大学)

今野貴之 (2015) 国際教育協力における日本の教育番組利用の可能性と課題ウズベキスタンを対象として．第 31 回日本教育工学会全国大会講演論文集，pp.133-134. (電気通信大学)

今野貴之 (2015) 中東・東南アジアにおける児童中心主義の教育の浸透と課題．初年次教育学会 第 8 回大会 公開シンポジウム「変わる初等中等教育の学びと大学初年次教育」.(明星大学)

Konno, T., Miyake, K. and Kishi, M. (2014) How to Improve the Effective Uses of the Blackboard Through Lesson Study in India? 8th World Association of Lesson Studies (Indonesia)

今野貴之 (2014) 国際教育協力における映像コンテンツ活用の検討．第 30 回日本教育工学会全国大会講演論文集，pp.187-188. (岐阜大学)

Kishi, M. and Konno, T. (2014) A Technology-Mediated Social Practice for Supporting Syrian Refugees. 12th International Conference for Media in Education 2014 (Korea)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況 (計 0 件)
取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

6. 研究組織
(1) 研究代表者
今野貴之 (KONNO, Takayuki)
明星大学・教育学部・准教授
研究者番号：7 0 6 3 2 6 0 2